

多胎児の神経機能の発達に関する研究

神経センター疾病研究第2部

有馬正高

1. 研究目的および方法

多胎のため light-for-date で出生した子供達がどのような神経機能の発達を示すかを記録し、評価することを目的とした。

障害児についてはその分布、正常な発達をとげていると思われる例については四肢機能、眼球運動、構語機能などについて自然の動作中の観察を主体とした。

2. 成績

1. 五つ子で出生した児童の観察（3才児）

a. 四肢機能

F, Y, T, H, Sの男子3例、女子2例の四肢機能は、全て右利き、物体把握時の距離および指位の維持は円滑、振せんや過伸展などの不随意的な動きは認められず、粗大な運動機能には問題はなかった。また、上肢前方挙上、両手で物体を持つ時の協調運動、持ちかえの動作も速やかであり、阻害する鏡像運動は認められなかった。

指での把握は拇示指主体であり、全指把握は時にみられる程度であった。細いライトのつまみの圧迫は拇指主体で指のつかいわけは発達していると推定された。

下肢機能に関しては歩行時の尖足、内反、内転などは認められず、比較的スムーズであった。但し、Sは軽い内旋と内転の傾向を認めることがあった。Sは走る時両上肢の挙上をともなっていた。

b. 眼球運動

全例、眼位はほぼ中央にあり、近点注視時の内転、側方注視時の外内転に制限は認められなかった。眼球振とうも認められず、粗大な眼球運動、両眼視機能には異常はないと考えられた。

追視運動時の眼球の動きのスムーズさについては、顔の動きと協同するときと眼球のみの追視の時が見られた。スピードが早いと sacchadic な動きが認められるが、全体に動作はスムーズと考えられた。

c. 構音、発音

stutter などの rhythm の変化、緩徐化、単語の音の順位のいれかえなどは全ての子供にきづかれず、速度、語数とも発達はかなり遂げていた。会話は二

語文が主体であり、肯定、否定文のつかいわけは可能であった。

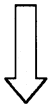
発音はサ行→タ行の変換が全例にあり、サ行の発達は未熟であった。

その他、Fにおいてハ→ア、ショ→ト、Yにおいてツ→ク、シェン→チェンがあり、Hでシーイ、リ→イなどの発音の転換が時として気づかれた。

2. 脳性小児麻痺児と多胎

脳性麻痺などの脳障害の発生は多胎児に多いと推察される。年度別にみてその全脳性麻痺に対する比率を追えば、脳性麻痺中でしめる多胎児の重要性が推定され、一般人口中の脳性麻痺の頻度の推移と比較すれば多胎に対する管理の進歩を推定する参考になろう。

1955 - 1960 出生の間の脳性麻痺家系では双胎の頻度は729家系中21家系 2.9%、1961 - 1965 出生の統計では310家系中11家系 3.5%であった。その後の時期の頻度の推移については目下検討中である。これらの頻度は、一般の双胎の頻度に多し5倍程度であって、双胎が脳性麻痺になる率は単胎よりも高率と推定された。なお、この時期の脳性麻痺家系には3胎以上の脳性麻痺は経験されなかった。なお、ep + ep という組合せは4家系であり、ep + 新生児死亡15家系、ep + 正常11家系で相手が高率に死亡していることが注目された。



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



1. 研究目的および方法

多胎のため 1tght-for-date で出生した子供達がどのような神経機能の発達を示すかを記録し,評価することを目的とした。

障害児についてはその分布,正常な発達をとげていると思われる例については四肢機能,眼球運動,構語機能などについて自然の動作中の観察を主体とした。